精神神経科

就任のご挨拶と精神神経科の紹介

2024年4月1日より福岡大学病院精神神経科の診療部長に就任いたしましたので、ご挨拶と当科のご紹介をさせていただきます。当科は1973年に開講し、初代西園昌久教授、2代目西村良二教授、3代目川嵜弘詔教授に続き私が4代目教授となります。ちょうど開講50年を迎え、次の50年に向かう節目、さらには新本館が開院となる節目の年に診療部長を拝命し、身の引き締まる思いです。私は平成15年に産業医科大学を卒業し、医師としての研鑽を積みました。精神科医として、大学病院、総合病院、精神科病院での勤務経験に加えて、大企業での専属産業医経験がございます。このような背景から、これまでに労働者・学生のメンタルヘルス、総合病院におけるリエゾン精神科医療に力を入れてまいりました。また、専門的な研究分野としましては、精神薬理学、生物学的精神医学、産業精神医学、個別化精神科医療研究に携わってまいりました。これらの臨床・研究成果を生かしながら診療活動を行っていきたいと思っております。また近年では、うつ病、双極症、統合失調症のガイドライン作成メンバーとしても精力的に関わってまいりました。

当科の特徴は様々な専門性を有したスタッフが在籍していることです。児童・思春期、老年期、統合失調症、気分障害（うつ病、躁うつ病）、不安症、パーソナリティー症など多くの疾患に対応が可能な体制があります。また、総合病院ならではの自殺企図症例、身体合併症入院、リエゾン精神医学、緩和ケアなどの症例も専門性をもって対応することができます。さらには、精神科治療の中でも大きな柱である精神療法、薬物療法、リハビリテーションの3分野に関してもバランスの良い治療ができる体制を整えております。

精神科疾患は、社会生活や人生、家族にも大きな影響を与えることがあります。患者さんの病気や疾患に目を向けるだけではなく、その方の生活や人生に寄り添えるような治療、また価値観に耳を傾けられるような“あたたかい医療”を提供できるようにしていきたいと考えております。さらには福岡市やその近郊の医療圏の地域医療にも貢献していくことが使命であると考えております。今後も福岡大学病院の発展に貢献できるように精進したいと考えておりますのでご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

精神神経科　教授・診療部長
医師　堀　輝（ほり　ひかる）

Open! 当院では、各種SNSを開設しています！
公式YouTubeチャンネル
https://www.youtube.com/channel/UCYwMO3PwlaDYNVvXTXVUocA
Facebook
https://www.facebook.com/FukuokaUniversityHospital/
twitter
https://twitter.com/FukuokaUnivHosp
instagram
https://www.instagram.com/fukuokaunivhosp/

福大病院ニュース
Fukuoka University Hospital News
No.127
2024 春号 SPRING

救命救急センター

診療部長就任のご挨拶

2024年4月1日付で、救命救急医学講座の主任教授ならびに救命救急センター・ECMOセンター長に就任致しました。私は2004年に福岡大学医学部を卒業後、福岡県内外の医療機関で臨床修練を積み、米国での研究留学を経て福岡大学病院での臨床・研究・教育に携わっております。

福岡大学病院救命救急センターは、1987（昭和62）年4月に開設された福岡大学病院救急部が、1992（平成4）年4月に大学病院併設型の救命救急センターとして発展、拡充したものです。当センターの診療圏は、福岡市中央区、城南区、早良区、西区、南区および近隣市町村などで、人口70万人ほどをカバーしています。我々の診療の柱は①重症患者の初期治療（救急隊および院内外からの重症患者の受け入れ）、②緊急手術を含む集中治療、③病院前救護（ドクターカー）、④災害医療になります。2020年、Coronavirus disease 2019（COVID-19）のパンデミック時にはCOVID-19重篤患者の受け入れを積極的に行い、体外式膜型人工肺（Extracorporeal membrane oxygenation：ECMO）を用いた高度な集中治療管理を行うことで大学病院として地域医療に貢献してきました。さらに同年7月1日より九州で唯一の重症呼吸管理に特化したECMOセンターを救命救急センター内に併設する形で開設し、COVID-19パンデミック以降も重症呼吸不全患者を積極的に受け入れております。当センターは救急医療の最後の砦として福岡地域の医療にこれからも貢献して参ります。

COVID-19のパンデミック、近年の自然災害、救急搬送件数の増加等に伴い、救急医が社会に果たす役割はより大きなものになってきていると感じております。また、救命救急センターには救急医を中心に、様々なサブスペシャリテーを持った医師が在籍しており、全診療科との協力体制で多種多様な重度の病気やケガに対応します。加えて、看護師、臨床工学技士、理学療法士、薬剤師、管理栄養士等のコメディカルとも協力し、チーム医療で救命および社会復帰に全力で取り組んで参ります。

図1：救命救急センタースタッフ一同

救命救急医学講座　主任教授
救命救急センター長 /ECMOセンター長
医師　仲村 佳彦（なかむら　よしひこ）

福岡大学病院
〒814-0180 福岡市城南区七隈七丁目45番1号
TEL（092）801-1011㈹ URL：https://www.hop.fukuoka-u.ac.jp/

整形外科

就任のご挨拶と整形外科のご紹介

2023年12月1日より山本卓明教授が福岡大学西新病院の病院長に就任されましたので、後任として診療部長となりました。私は平成14年に福岡大学を卒業し、関連病院・海外研修以外の20年間を福岡大学病院にて医師として研鑽を積んで参りました。引き続き、教室員一丸となりまして高度かつ、「あたたかい医療」を提供できるように努力をして参ります。

整形外科では、首から足までの運動器疾患の診療を行っております。また、全国の大学病院の中でも有数の手術症例数を安全かつ確実に遂行するために、山本卓明教授以下17名の各専門分野のスタッフによって診療に臨んでおります。小児の整形外科疾患から骨軟部腫瘍に至るまですべての分野の治療を行っておりますが、特に力を入れております治療内容をご紹介いたします。

❶股関節班

最新の医療技術を取り入れながら、大腿骨頭壊死症・変形性股関節症に対する骨切り術などの関節温存手術や人工関節置換術を行っております。最近では、患者さんへの負担を軽減するために左右同時に人工関節を施行する取り組みを行っています。

❷足の外科班

九州の大学病院では唯一の日本足の外科学会教育研修施設に認定されており、有数の手術症例数を誇っています。スポーツ障害に対する小侵襲の鏡視下手術から外反母趾などの変性疾患にまで幅広く治療を行っています。

山本教授人工関節置換術の手術風景

❸膝関節班

靭帯損傷をはじめとするスポーツ外傷に対する鏡視下手術、変形性膝関節症に対する関節温存手術である骨切り術や人工関節置換術などを行っています。最近では、ロボット支援手術を取り入れ、より良い治療成績の獲得に取り組んでおります。

❹肩関節班

特に、反復性肩関節脱臼をはじめとするスポーツ外傷に対する鏡視下手術は九州有数の治療実績を持ち、腱板損傷・変形性肩関節症などに対しても鏡視下手術・人工関節置換術など積極的に治療を行っています。

❺脊椎班

脊柱管狭窄症をはじめとする変性疾患に特に力を入れて治療を行っております。また、頚髄損傷などの救急外傷に対しても常に対応できる診療体制をとっております。

❻手外科班

外傷をはじめ、手根管症候群などの手のしびれに対する治療を内視鏡や顕微鏡などを用い、最小侵襲手術の取り組みを行っております。

整形外科では常に高度な医療技術を取り入れながら患者さんの満足度を高めるための技術研鑽・研究に日々努めております。

今後も患者さんに満足していただけるよう、さらに福岡大学病院の更なる発展のため努力して参りたいと思いますので御支援・御指導のほど宜しくお願いいたします。

整形外科　診療部長
医師　前山　彰
まえやま　あきら

放射線科

放射線科診療部長就任のご挨拶

令和６年４月１日付けで、福岡大学病院放射線科診療部長を拝命致しました。私は平成12年（2000年）に九州大学医学部を卒業し、九州大学病院や関連病院にて、主に体幹部のCTやMRI、血管造影による画像診断やIVR（インターベンショナルラジオロジー）による診療や研究に携わって参りました。令和３年４月より福岡大学へ赴任し、現在は同科の准教授を務めております。令和５年12月1日より吉満研吾主任教授が福岡大学副学長に就任され、令和６年３月31日に長町茂樹放射線部第二教授が定年退官され、私が診療部長を引き継ぐこととなりました。未熟な点もございますが、宜しくお願い致します。

福岡大学病院放射線部は、放射線部第一（X線、CT MR 診断、インターベンショナル・ラジオロジー部門）、放射線部第二（核医学、放射線管理、放射線治療部門）で構成されています。放射線科医師（図１）はそれぞれの専門分野に分かれ、診療を行っております。令和6年5月7日より新しい病院にて診療を開始致しますが、それに併せて放射線診断と治療に関する装置として、Canon社製320列CT、Philips社製３テスラMRI、Canon社製Angio CT装置（血管造影装置と80列CTの組合せ）、Siemens社製PET-CT、Varian社製放射線治療装置等が導入されます。また、神経内分泌腫瘍に対するルテチウム-117標識ソマトスタチンアナログ内用療法や、小径腎細胞癌や類骨骨腫、転移性骨腫瘍、早期乳癌等に対する経皮的ラジオ波焼却療法も施行可能となり、患者さんに今よりも更に質の高い医療が提供できると考えます。

最近のトピックの一つとして、アルツハイマー病による軽度認知障害及び軽度の認知症の進行抑制効果を持つレケンビ（一般名レガネマブ、エーザイ株式会社）が令和５年12月20日に保険適応となりました。それに伴い、適応条件の評価に必要な検査であるアミロイドPETが施行可能となりました。当院は、ビザミル（一般名フルテメタモル（^{18}F）、日本メジフィジックス株式会社）をPET検査用の放射性医薬品として使用しています。アミロイドPETの画像診断（図２）は、トレーニングを受けた放射線科診断専門医が行っております。治療適応の対象と考えられる患者さんがおられましたら、当院の脳神経内科もしくは精神神経科の受診をお願い致します。放射線科もグループの一員として、お手伝いさせて頂きます。

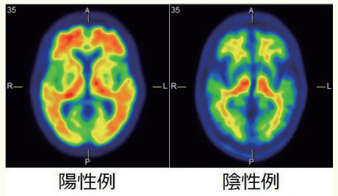
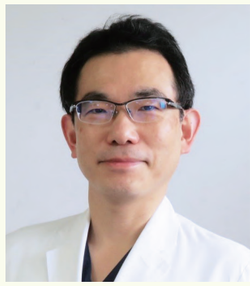


図２：ビザミルを用いて撮像したアミロイド PET。陽性例と陰性例の図。図は Visamyl Viewer（日本メジフィジックス株式会社）より引用。

図１：放射線科医局員一同



放射線科　診療部長
医師　高山 幸久
たかやま　ゆきひさ